
私の幸せは彼女らのために

コネのあるあの猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の幸せは彼女らのために

【Nコード】

N4964R

【作者名】

コネのあるあの猫

【あらすじ】

富豪だった『私』は何故か富豪とは程遠い、貧乏街の住人になつてしまっていた。どうしてこのような事になってしまったのか。『私』は思い当たる記憶を探り始める……。そして行き着いた答えとは！？ 意外と浅い、謎を解き、さまざまな経験を繰り返してふたたび元の自分を取り戻していく。そんな、切なくて、ドロドロで、感動できる異世界サクセスストーリー！。

第1話〜時は遡ること8時間前〜（前書き）

この小説はただの気まぐれです。かなり短く終わるか、グダグダと長く連載するつもりなので、どうか読者の皆様、長い目でお付き合ってくださいませ。

第1話　時は遡ること8時間前

「心から願えばきつと神様は聴いてくれるのだろう」

薄気味悪い曇り空から、ポツポツ、と濁った雨が落ちてくる。

こんな雨の日は、家の中でゆっくりとしたいものだ。小難しい本を片手に、コーヒーでもあれば、とても幸せな時間がすごせるはずだ。

しかし、今の状況と言えば、路地裏で拾ったボロボロの布を体に巻きつけ、荷物といえる物は何もなく、両手が寂しく空いている。その姿は、よくイメージされる、ホームレスと呼ばれる人の風貌そのものだ。思い描いた姿とは程遠いことに、私は落胆せずにはいられなかった。

どうしてこうなってしまったのだろう。……思い返せば、全てが裏目に出ていたように感じられる。

私は嘆くことしかできず、暗く狭い裏路地の真ん中にうずくまっていた。

雨はますます勢いを増すばかりだった――

8時間前

「おめでとう」

私は手を叩き、娘の、9回目の誕生日を盛大に祝っていた。彼女の目の前には1メートルはあるバースディケーキが居座っている。

「パパ！　ありがとう！」

そいつって私の頬に優しくキスをしてくれる。

私と娘、二人だけの誕生日だが、喜んでくれているようだ。時折、

私に隠れて悲しそうな顔を見せるのが、ひどく辛く思える。

本当は親子4人で楽しく祝ってあげたかった。しかし、妻は出張で海外に出ており、息子に至っては刑務所に入れられている。

今からでも息子を引き取り、助けてあげることができたが、それでは彼のためにはならないと思い、心を鬼にして処罰を受けさせたのだ。

せめて妻には帰ってきてほしかったが、あの人が、娘の言う言葉特に、私の言うことに聞く耳を持つはずがない。

昔からそうなのだ。常に自分が中心で、他人のことなど眼中、いや、存在さえ感じているのかどうかも分からない。

だけど実際は、私と結婚してるし子供も二人いる。案外、彼女は人を気遣える優しい女性なのかもしれないな、と思うことは思うのだが、違っだろう。

まあ、私はそんな所を理解できなくてもいい。なぜなら彼女を愛しているからさ！　そうさ、私は彼女のことを愛している！　それこそ彼女の全てを包み受け入れられるほどの愛だ！　なぜこんなに愛しているかだって？　いいだろう！　教えてあげよう。今日は特別だ！　なんとたって娘の誕生日なのだから！　よし、そうと決まれば（長くなるので割愛）

話は戻る

ふうー！　娘が、小さな可愛らしい頬を膨らませ息を吐く。ろうそくの上で煌めいていた炎が消され、それに伴い使用人が明かりをつけ始める。

「さあ、食べようか」

私は軽く手を振り、使用人にケーキを切るよう合図を送る。

その間に娘にプレゼントを渡そうと隠し持っていた小さなケースを、コートの内ポケットから取り出す。

「姫乃、プレゼントをあげよう。こっちへおいで」

娘は喜んでくれるだろうか。そればかりが頭をよぎり、私は心配でならない。

ああ、もし娘の趣味に合わなければどうしよう……。嫌われてしまったらどうしよう……。なんて考えていると、娘は満面の笑みを浮かべて、

「わあ！　いったい何かしら。楽しみだわ」

と言いながら駆け寄ってきてくれた。それだけでも嬉しいものだが、この愛らしい娘は、私のすぐ隣まで来て、人形のような顔で私を見上げていた。

ああ、この可愛らしい顔に悲しい表情をさせてはいけない。この子は常に笑っていてくれなければ。それが一番だ。

「気に入ってもらえるといいのだが」

私は、娘の手を取り、小さく微笑みながら、綺麗に包装されているケースを手渡した。

「何かしら？　開けてもいいよね、パパ？」

私は小さく頷く。

「何だろう……。あつ！　わかったわ！　ペンダントね。そうでしょ！」

「ふふつ、正解だよ。どうだい？　お気に召したかな？」

私はなぜか嬉しくなり、娘の頭を撫でた。

柔らかくてよく手入れされている金色がかった茶色の髪は、ふんわりとほのかに香るバラの香りがする。それに違和感を抱きつつも、そっと触れる。

きつと、妻のせいだろう。小学生にバラは無いだろうに……。まあ、気にはならない程度なので何もいわないことにした。娘には。

「ちよつと待ってね、今開けるから……」

「あわてなくていいよ。お父さんは少し、お手洗いに行ってくるから、ケーキを食べてなさい」

「はい……」

娘は、思いのほか凝っている包装に見とれているようだった。小さな手でリボンと奮闘している姿がまた、たまらなく愛しい。

よし、行くか。

私の本当の用事はトイレなどではない。

何故か合図したはずの使用人が来ないので、叱ってやろうと思いついたのだ。そして私は、使用人の使っている部屋まで歩を進めていったのだった。

この先に待つ、悲劇の影をゆっくりと踏みながら……

第1話〜時は遡ること8時間前〜（後書き）

どうでしたでしょうか？ 楽しんでいただければ光栄です。

まあ、コレだけではまったくわからないと思いますので、なるべく早い作成・投稿頑張ります。

第二話〜時は遡ること7時間前〜（前書き）

今回は短いですが、次回は面白くなるはずです！
それでもご覧ください。
ださったら、超嬉しいです。

第二話　時は遡ること7時間前

7時間前

扉を出ると、左側の通路を進んだ先にある螺旋階段を、早足で降りる。

くそつ。降りにくいな、これからは急ぎ用の階段でも造るか。構造的には無理があるが、スペースと一緒に造れば関係無いだろう。

なんて事を考えながら、三階から一階まで降り、リビングに向かう。

使用人たちのいる部屋、『執事室』は、リビングを通り過ぎた先のドアを開けて、部屋を二つ過ぎた後、長い廊下を進んだ突き当たりにある。

大きな家は嫌いではないが、こんなときはひどく面倒に思える。しかし文句を言っても仕方が無い。私は、怒りと怠惰の混じった溜め息をつきリビングを進んでいった……。

ああ、ちなみに、怒りは家に対してで、ケーキを切らなかった使用人に対してではない。

私は、なぜケーキを切らなかったのか。

その理由が知りたいだけなのだ。

使用人を責める気になんてなれない、むしろ、何かあったのか？と心配するほどだ。そこは勘違いしないでほしい。

これはただの独り言である

異変に気づいたのは二つ目のドアを過ぎようとした所だ。このドアは守衛やSP（警護の者）が生活する部屋なのだがまったく人の気配が無い。

いつもなら、少し疲れた、しかし楽しそうな笑い声が聞こえてきて、私はいつも申し訳ない気持ちになっていたものだ。

しかし、このような小さなことを気にしては本来の目的を忘れてしまう。

私は、少し不安を覚えつつも先へと進んでいった……。

廊下を歩いている途中、私の中でふと、ある考えが浮かんでしまった。

『何かアクシデントがあつたのか？』

いや、そんなはずはない。何故だなんて疑いようも無い。家の周りには、三十人ほどの警備員を朝昼晩でローテーションしていて、外からの進入対策は万全だ。

雇っている奴らも疑いようが無い。何せ金で雇った繋がりが無い人間などでは無く、全員が、私が育ててきた子供のようなものなのだ。

無論、明かりをつけた使用人『沙耶華^{さやか}』と、ケーキを切らずに何処かへいった『秋帆^{あきほ}』もそうである。

しかし、この廊下はおかしすぎるだろ。見た目は違わないが、明らかに雰囲気と言ったものが違った。

何というか、進むたびに空気が重たくなっていく。息苦しくもあり、前に進みたく無い。何故だろう。嫌な予感しかない。

しかし、私は進むしかなかった……。

…… やつと着いた。くそ。

『執事室』はやけに静かだ。それが不安を煽り、恐怖を連れて来る。寒気もしてきた。

が、行くしかないだろう。私は静かに、重たく、ゆっくりと手をかけた――

第二話〜時は遡ること7時間前〜（後書き）

次回は盛り上がるぜ！

改變しました。次からは一発合格するよう頑張ろう……！

連載終了のお知らせ

突然ですが、作者の都合と考えた結果により、連載を打ち切ることにしました。

この話を読んでいてくれた皆様。

作者の勝手な都合により、打ち切りとすることを心よりお詫び申し上げます。

執筆活動は続けるつもりなので、見守っていただければ幸いです。

本当に申し訳ございません。

文字稼ぎ

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4964r/>

私の幸せは彼女らのために

2011年3月27日19時40分発行